

武州みたけ

第五十三号

朝長尾平を抜けて少し歩くと小さな展望台にたどり着きます。強い朝陽がより一層落ち葉の赤を際立たせていました。

(写真・文 鶴巻 育子)

神社祭時記

三月二十四日 元服式。御岳登山鉄道の主催で、奈良時代から続く武家社会の成人の儀式として知られる「元服式」が行われました。今年で三回目、十二歳～十八歳の男女十名が参加し、武家装束である直垂に身を包み参列し、元服の祝詞を奏上後、加冠の儀（宮司より刀を授け侍烏帽子を加冠する）を行いました。各々の節目として、若者達の背筋が伸び、引きしまった顔がとても印象的でした。



四月二十九日 第七十三回奉納剣道大会。参加六十チームの中激戦を制したのは、優勝・青梅錬心館、準優勝・東京霞剣友会、三位・立川拘置所・青梅中央道場でした。

五月八日 例祭「日の出祭」。世界の平和・国家安寧・家内安全を祈願し、ケーブル山上駅より神社までの参道を神輿が渡御しました。

六月三十日 夏越しの大祓。半年

の罪穢れを祓い清めました。

また、修行体験講座も開催され、綾広の滝での禊行や、奥の院・上高山までの山駆けを行いました。この講座は六月～九月に計三回開催されます。

七月八月、猛暑長梅雨と天候に悩まされましたが、御岳山商店組合主催のレンゲショウマ祭においては、当社に伝わる太々神楽の舞や昆虫観察会、忍者イベントなど多くの催しが開催されました。花の妖精レンゲショウマが咲く中、多くの登山者が足を運びました。

七月一日 稲荷社遷座祭。腐朽著しい社の修復工事が七月中旬から始まり十一月には終了の予定です。

九月に入り虫の女王カンタンの声が山に優しく響き渡ると、風も涼しくなり秋の到来を感じさせます。今年も元ぐんま昆虫の森園長矢島稔先生をお招きして、「カンタンを聞く会」を開催致しました。

九月二十九日 流鏑馬祭。夕闇の中神事後、撒かれた木片を持帰る氏子達。無病息災を祈念ながら、その木片に焼き魚を乗せて食しました。

せんぞ
踐祚改元奉告祭

記念植樹

お印：梓（アズサ）

五月一日、皇太子殿下には踐祚あらせられ、御譲位により「令和」に元号が改められました。これに合わせ午前十一時「踐祚改元奉告祭」を執行致しました。新帝徳仁陛下が皇位を継承され、改元されたことを神前に奉告しました。祭典終了後、徳仁陛下御即位記念として、お印の「梓（アズサ）」を幣殿横の境内地に植樹致しました。



御岳山の行事

平成三十一年

一月 一日 元旦祭

三日 太占祭

大口真神社祭

二月 三日 節分祭

初午 稲荷社祭

三月 八日 春季大祭（祈年祭）

奉納俳句奉告祭

四月 下旬 産安社祭

二十九日 奉納剣道大会・介山祭

令和元年

五月 七日 日の出祭（宵宮）

八日 日の出祭（神輿渡御）

十五日 男具那社祭

大口真神社祭

六月 十六日 神楽と雅楽の一般公開

二十・三日 修行体験講座（二泊）

夏越大祓

七月 十三日 レンゲショウマまつり

（九月十四日）

十三日 薪神楽

十五日 滝行体験講座

九月 七日 カンタンを聴く会

十四日 神楽

二十九日 大口真神社祭

流鏑馬祭

十月 二十八日 一日修行体験講座

神楽と雅楽の一般公開

十九日 天空もみじまつり

二十四日 （十一月二十三日）

十一月 八日 秋季大祭（新嘗祭）

末社祭

十二月 八日 みたけ山トレイルラン

二十三日 天長祭

三十一日 大祓

六月～十一月 第四日曜日 夜神楽

毎月 八日 月次祭

毎日 日供祭

大都会。東京の、太自然。御岳山に想う



なんとも見事に苔生したロックガーデンには、ヤマメがたくさん泳いでいる。パーマークと呼ばれる美しい斑紋模様を持つ、冷たい水に棲む魚だ。ぼくはたいがい、この渓谷を歩くとヤマメ探しに夢中になってしまふ。まさか東京でヤマメ探しとは——いや、東京にこれだけヤマメがいるなんて——都会に憧れて上京したあの時からすると、まったく思いもよらなかった未来を、ぼくはいま御岳山で楽しませてもらっている。

宮城で育ち、釣りばかりする少年期を過ごした。溪流にはじまり、湖沼、海にもよく通った。山形との県境を源流にする小さな沢にお気に入りの入りがあり、よく溪

に分けいったものだった。あの頃に覚えた沢歩きは、山旅をしながら文筆業を営むぼくの忘れ難い原体験となっている。

小さな沢を気ままに泳ぐヤマメは、底に沈む石の模様や水紋にとけこんで、なかなか視認することができない。警戒心が強く、発見するにはちよつとした根気と目の慣れが必要となる。ハイカーたちはロックガーデンに案内する度、ぼくはヤマメの話をしながら「ほら、あそこ！」と指をさす。特にこどもたちは夢中になつて魚を探し、それと認めると誇らしげに「見えた！」と快哉を叫ぶのだ。歓喜の雄たけび、といえは、令和になつて間もない御岳山で珍しいものを見かけ

た。宿坊の並ぶ参道の木に取り付けられた靴箱大の巣箱だ。それはムササビの寝床になっていて、まるで猫が丸まったような「背中」なら何度も見ることがある。その日、御岳山を初めて訪れるというハイカーたちとともに巣箱の前に差し掛かると、ムササビが穴から「頭」を出して寝ているではないか。まるでぬいぐるみのようだが、時おりゴソゴソと動いてみせる。あんな風に無防備に眠るムササビを見たのは初めてのことで、その珍しい光景にみな嬉々として喜んだのだ。そういえば、カモシカやサンショウウオにも出会ったことがある。鮮やかに移ろう御岳山の自然に、賑やかに暮らす生き物たち。こういう自然体験を重ねると、大都会・東京の自然も悪くはないと、笑みがこぼれてしまふ。(文と写真 大内征)



おうち
大内 征
低山トラベラー
／山旅文筆家

土地の歴史や物語を辿って各地の低山を歩き、自然の営み・人の営みに触れながら日本のローカルの面白さを探究。ピークハントだけではない「知的好奇心をくすぐる山旅」の楽しみ方と、歩いた山里の魅力について、文筆と写真と小話で伝えている。

NHKラジオ深夜便「旅の達人」低い山を目指せ！出演中。著書に『低山トラベルシリーズ（二見書房）』『低山手帖』（日東書院本社）など。NPO法人日本トレッキング協会理事。宮城県出身。



●● 講中を訪ねて ●●

「長沢御嶽講について」

川崎市 長沢御嶽講 講元 末吉 一夫

私ども長沢御嶽講中は、川崎市多摩区南生田、および長沢の旧農家の方々等、七十二戸の講員の皆様で講を構成しております。当地区は、多摩区となる前は川崎市生田長沢であり、長沢講として存続しております。また、新年二月になりますと、久保田御師様が当地域に来訪され、二日間かけ講員宅を巡回し、お札の配布、祈祷をして頂いております。この近年は、御師様親子二人で巡回され、講員の皆は楽しみにしております。この地域は、特に平成に入り住宅化が進み、専業農家もなくなり、小生が父より受け継いだ頃とは様子がかなり変わってきております。しかし、長沢講の方々には御嶽講に対し、先代から引継がれた伝統を守り、現在に至っておりますが、中には先代からの引継ぎ、継承がはっきり出来ておらず、武蔵御嶽神社、御嶽講の講員であることを知らず、家を引き継がれる方がおられます。そこで講員であることの証として、平成二十二年宿坊能保利、母屋改築時に、本改築記念の材、御柱をもとに、武蔵御嶽神社の御犬様のお姿を頂き、「武蔵国御嶽山 講員証 長沢講中」を仕上げて頂き、講員の皆様に配布して頂きました。今後とも御嶽講の講員であることを誇りに思い、継承していただける証となることを願っております。



私ども講は、武蔵御嶽神社、御嶽講能保利会の講社の一講で、毎年十月には、能保利会の講社四十一講の代表が、御師久保田様の宿坊大広間に参集し、総会が開催され、講員の親睦、講及び御師の発展並びに、それぞれの講の皆様とお会いできることを楽しみに参加させて頂いております。

また、酉年式年大祭、御嶽蔵王権現大公開時には、講員皆で地域と講員の家内安全、五穀豊穡を祈念し、ご加護を頂きますよう参拝させて頂きました。



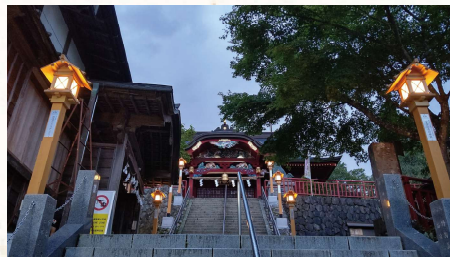
主幹宮司 久保田 直行
所在地 神奈川県川崎市
講員数 約七十二名

結びに、武蔵御嶽神社の益々のご隆盛と久保田御師様、ご家族のご健勝とご多幸をご祈念申し上げます。

灯籠奉納

多くの方にご奉納いただき、拝殿前に八基建立させていただきました。厚く御礼申し上げます。

一基 奉納者 (順不同・敬称略)



株式会社 荒井電業社
代表取締役 荒井 成典
日本書鏡院
長谷川耕史
野崎啓太郎・野崎恵子
村野 英夫
岩浪 勝二・岩浪睦子
富士鋼工業株式会社
学校法人 吉野学園
すぎの森幼稚園

※奉納者ご芳名の詳細は、次号にて掲載させて頂きます。

「縄文阿吽大口真神像」奉納



八月二十四日、東京都青梅市沢井在の縄文土器作家ともいわれる陶芸家大敷龍二氏より、「縄文阿吽 大口真神像」をご奉納頂きました。この御狗様像は大地と野生、土と炎の躍動を感じさせる素晴らしい作品です。有難うございました。

「大嘗祭」

だいにようさい

今年五月一日より令和の御代が始まりました。一二〇代仁孝天皇以来の譲位によるご即位となり、多くの人々が上皇陛下への感謝と奉祝の中、新天皇が誕生されました。そして、十月二十二日即位礼、十一月十四・十五日の大嘗祭が執り行われ、広く内外にご即位を宣明されます。この一代一度だけ行われる大嘗祭について少し記します。

天皇陛下の行う様々な祭祀の内、新嘗祭^{にいのみさい}という律令以前より行われている神事があります。現在は、宮中の神嘉殿^{しんかでん}にて十一月二十三日夕方と二十四日明け方の二度、天照大神を



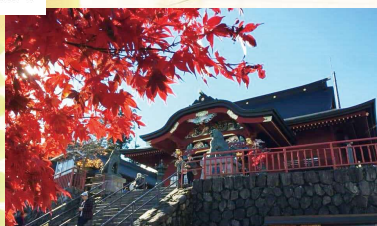
大嘗宮模型

始め全ての神々に、陛下自ら新穀をお供えになり、神恩に感謝申し上げ、陛下も同じお膳を召し上がります。全国の神社でもこの日、新嘗祭が執り行われ、地域で収穫された産物が神前に献上されます。国民の祝日である勤労感謝の日の本来の姿です。

そして、新天皇が即位して始めて行うこの儀式を大嘗祭といえます。新嘗祭との違いは、話題になりましたた^た龜^{かめ}トにより悠紀^{ゆき}（京都以東）・主基^{すき}（京都以西）両地方が選定され、皇居東御苑に大嘗宮が設営され、そこで行われることです。日には十一月中または下の卯の日とされていますが、今回は中卯の十一月十四日午後十時頃より翌午前二時頃にかけて、大嘗宮の悠紀殿・主基殿それぞれに、今回選定された栃木県・京都府の斎田で収穫された新穀が供されます。古くから受け継がれる祭祀ですが、明治四十二年登極令で近代の定型が決められ、現憲法下でもこれを目安に平成の大嘗祭が執り行われました。神の恵みに感謝するとともに、それに関わる方々に感謝し、神とともにお祝いする、新天皇として一世一代の行事といえます。



御岳山観光協会HP



2019 天空もみじまつり

10月19日～N月24日



武蔵御嶽神社

http://www.musashitakejima.jp

彩りの秋
御岳山

猛暑も過ぎ、鳴く虫の女王「カンタン」の奏でる音色が早秋の訪れを告げました。秋は気候も落ち着き、参拝やハイキングに適したシーズンとなります。

当社では十月に「神楽と雅楽の一般公開」、十一月までの第四日曜日に開催される「夜神楽」で文化に、「秋季大祭」や「元旦祭」「初詣」等では、神事や伝統に触れていただくことが出来ます。その他にも御岳山商店組合主催の「天空紅葉祭り」では忍者や芸者イベント、ヴァイオリンコン

サートなどが開催され、山の賑わいに花を添えます。

神職たちの営む宿坊では秋の味覚が供され、弄月^{ろうげつ}・虫の音と秋の夜長を楽しみながらお泊りいただけます。例年十月下旬頃に山肌が色付きはじめ、其の身に錦を纏い始めます。ご家族やご友人たちと、ご家族の一員である愛犬をつれて、一面に敷かれた紅葉の絨毯を踏みしめながら、芸術や文化・伝統や芸能に触れながら秋の御岳山へ是非ご参拝ください。

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ 29

『齋藤義彦自筆『太々御神樂祝詞』』

日本風俗史学会 會員
元青梅市文化財保護審議会会長

齋 藤 愼 一

宝物殿で発見された「太々御神樂祝詞」
(全十一枚のうち後半四枚と奥書まで)「股引草鞋玉小簀 すぎの小笠の波たち
て旅の装束も、み吉野の御嶽のみのちの行程
は、娘盛りの十六里」

これは、天保五年（一八二五）刊行の武蔵御嶽山への道中案内「御嶽菅笠」の書き出しです。日本橋から御嶽山への街道の風物に、旅館・休み所まで織り込んだ美しい七五調の古典的な「道行」のかるやかな文体です。その作者は、埼玉県秩父郡小鹿野町（当時の長留村）の神職だった神道学者齋藤義彦（天明四年・一七八四―天保十二年一八四一）で、和歌にも優れた人です。こんな文才や発想で、人々に古典に基づく神道を広めようとしたのが齋藤義彦で、「御嶽菅笠」の本文は晩年五〇歳の頃の作品でした。

それ以前義彦は、すでに三〇歳頃までに御嶽山には千度も登り、御師家の青少年たちと交流し、講の信者と山の御師たちの共同祭祀である御嶽山の太々神樂舞十八座を研究した「御嶽山 大麻止乃豆乃天神社太々御神樂考」三巻三冊を著しています。あとがきで御嶽の御師の片柳栄重という人が、三十一歳の義彦を「我が師人（ものおしへびと）」と評価しています。その後日本古来の神道へ、実践的にわかりやすく導く小形折本子「神拝小言集」の天保三年

(一八三三) 刊行に、「御嶽菅笠」の魅力的な文章に、義彦は古典による学識・感性を発揮したのです。さらに身近に参拝できる郷土の「延喜式」の神社の所在地や祭神を確定し、その道法をつけた案内書も刊行したようで、江戸住みだった青梅の文人の山田早苗は、「玉川源流日記」の中にその一部を写し取り、また「御嶽菅笠」を入手したと記しています。

そんな齋藤義彦が壮年三〇歳代のはじめに執筆した「太々神樂」奏上の神事に読み上げる「祝詞」の自筆草稿が武蔵御嶽神社宝物殿で発見されました。年代のはっきりした義彦自筆としては現在のところ、青梅で最古のものと思います。包紙まで残っている「文化十二年（一八一五）大麻止乃豆乃天神社、太々御神樂祝詞」とあります。「大麻止乃豆乃天神」とは、平安時代の法制の古典「延喜式」神名帳にある多磨郡八座の中の神で、それを義彦は「御嶽神社」の古名と考えていたのです。

祝詞の本文は、上質の美濃半紙を横につなぎ一紙（枚）に七行あって、本来奥書共十二枚でしたが、冒頭の一紙は欠失しています。本紙の向かって左上端に「一から十一まで順序を示す墨書は、一紙目が欠失してつなぎ目のはがれた残りの十二枚の散逸を恐れ、保存のために記入されたのでしよう。かなりの頻度で使用されたようで、上下のへりがすり減っています。

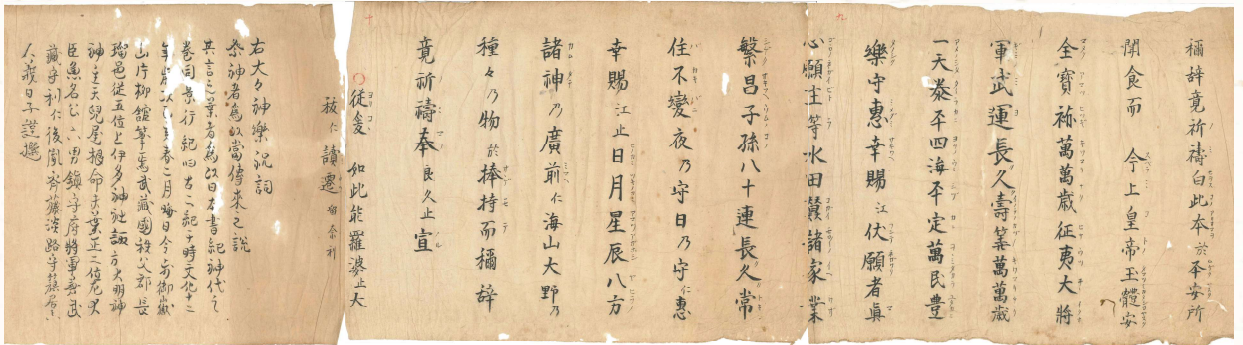
全体の構成は、まず、御嶽の山上に鎮座する大麻止乃豆乃天神で神事を行うことをのべ、次に御祭神である大日貴命と少彦名

命及び日本武尊の「神秘三座」三柱の神の国土経営と神威、次に「広（廣）国押武金日天皇（二七代 安閑天皇）と大伴金村大連（安閑天皇など三代に仕えた大伴の武将）の神々としています。従来の歳王大権現の神格を新しく古典的な神道風に言い換えたのです。古代へのあこがれでしょうか。次に「日本書紀」による天岩戸の祭祀の様子、諸職の祖神による神殿造作、皇孫統治による豊穡と安泰を述べます。天岩戸の祭祀と、天鈿女の神樂は太々神樂祝詞や神事のあり方を意識したものです。また天照大神の神殿造作の話、諸職の祖神・皇孫（天皇の祖）の統治の記述は、義彦の国家観と関わるものでしょう。

その辺りの原文を読み下してみます。

「今上皇帝、玉体安全、宝祚、万万歳（スベラミコトノ、タマツミカタシロ、ヤスタマタク、アマツヒツギ、キワマリナク）、「征夷大將軍、武運長久、壽算、万万歳（ヒナウツオオイクサギミ、ミヨナガクヒサシク、イノチノカズノ、キワマリナク）、「一、天泰平、四海平定、万民豊樂、守惠幸賜（アメノシタタイラカニ、ヨツノウミシツカニ、ヨヲミタカラユタカニタノシク、マモリミメグミ、サキワヘタマエ）「真心願主等、水田、蚕蟲、諸家業繁昌」（マゴコロノネガイヒトラ、ミツタ、コガイ、モロモノノイエワザ、シゲクサキワヘ）。

天皇の健康・長寿と皇位の永久、征夷大將軍（徳川將軍）の武運長久、寿命長久、そして太々神樂の祈願の人々の、稲作・蚕・家職の繁昌を祈っています。当時の日本は、



一枚分の半紙のサイズ 横 38.8cm×縦 27.5cm

徳川将軍が主権者でしたが、天皇と併立する国家を考えているようで、半世紀後に、天皇主権の国家へ展じて行くような考え方を義彦は「祝詞」の中で人々に説いているようです。

さらに注目すべきは、天皇家が神授による日本国の統治者である根拠を示す内容をもつ「祝詞」の「大祓」を前述の部分に続けて読めと指示している点です。「大祓」は「延喜式」の二十九編の古代の祝詞の中で最も長く、冒頭で日本の支配者が天皇家であるのは八百万の神々の意思と述べているのです。義彦は晩年の天保七年に「大祓略略解」、また同じ頃「玉鐸道伝」をあらわして、神々の意向によって天照大神の皇統である「神(天) 皇統御の靈域」の日本は「神国」、道は「神道」だとしています。のちの「尊皇」思想につながります。この「玉鐸道伝」の序文は、門人で青梅村上町の酒造家、守谷茂右衛門寛命の執筆です。「我が師義彦ハ少年時代カラ」皇神の道とふとみ(秩父郡ノ長留村ノ諏訪神社ノ神主齋藤能兼ノ養子トナリ熱心ニ)神に仕奉る行状のみに心入れつつ、石上古き神芸のおくがを極め」と述べています。青梅村上町(青梅市域)には、この守谷家と小峰家に義彦の自筆の資料が残っていました。御嶽の片柳三郎家にもあり、義彦自筆判定の根拠になりました。

さて、義彦は「従愛、如此能羅波止、大祓仁読還奈利」と指示して結びます。大祓は長い祝詞で、講中はくたびれてしまっただでしょう。しかしめったに聞くことのない

王権神授を説く「大祓」を義彦は是非聞かせたかったはずで。

そして奥書になります。奥書をつけるなんて、祝詞にはめずらしい。義彦の意気込みを感じます。書き下しにしておきます。

「右大々神楽の祝詞。祭神は当(御嶽社)伝来の説にして、其言の葉は「日本書紀」の神代之巻・同景行紀」「旧二紀(旧事紀か)」。時に文化十二年歳次己亥春二月晦日。御嶽山の片柳の館に筆を歩ましむ。武蔵国秩父郡長瑠の邑、從五位上伊多神社諏訪大明神神主にして、天兒屋根命の末葉正二位左大臣魚名公六男鎮守府將軍兼武蔵守利仁の後胤、齋藤淡路守旗井真人義日子(彦)謹みて撰ぶ。」

祭神は当社の伝来の説で、神話の部分は「日本書紀」の神代の巻と景行天皇の巻、「旧事(本)紀」によったとしています。御嶽山片柳の館云々とは、現片柳三郎家の片柳勘解由家で執筆したこと。同家には義彦関係の資料が多く、天保初年代に義彦が「公儀(幕府) 神道方」の吉川家の学士、代官、さらに学頭に任じられたことも辿れます。天兒屋根命から利仁の後胤までは、自分の家系が藤原氏であるということ。淡路守は二十四歳の文化五年(一八〇八)、朝廷から「むさし国秩父郡長留村すは大明神神主齋藤義日子」の名義で淡路守に任官した口宣案を左中弁和定により受領した正式の官名です。齋藤は、長留村の小名を姓として名乗り、真人は、八色の姓の一つですが、古代の氏の称号で、こんな時代遅れの名乗り方をするとここに義彦

の古代への憧憬を感じます。

この祝詞執筆以前に、同じ片柳勘解由家で義彦は、前掲の「大々御神楽考」で、御嶽の大々神楽の十八座を同じく、「古事記」「日本書紀」「旧事(本)紀」「延喜式」「万葉集」など多くの古典を参考にテーマ・登場人物・衣装まで研究していました。さらに汎例には「師説に愚案を加ふ」とあります。義彦は若年の折に、神楽舞を伝習していた秩父神社の神主園田筑前に神道を学んだと伝えるので、師説とは秩父神社の園田神主の教えの可能性ががあります。ちなみに神楽は、すでに廃絶したそうです。

大正十三年(一九二四)三月、神仏分離の跡を探索した鷲尾順敬は、当時御嶽山上の人々が義彦を師として「国典(古典)」を学んでいたの、いよいよ義彦の言っていたような世の中になったと思い、明治維新の神仏分離に対処したという故老の言を記録します。(明治維新 神仏分離史料)所収、御嶽のために道中案内の美文を綴った義彦は、近代の変革を迎えるにあたって、御嶽の山に大きな足跡を残していたのです。

御嶽にとっても義彦にも貴重なこの資料は、最近宝物殿で発見されました。

早急の執筆にあたり現地探訪や文献収集など、御嶽神社の須崎洋輔、天野宣子権桐宜、並びに青梅町方古文書会の小島みどり氏より、貴重なご協力を頂きました。併せて先学の義彦研究の業績として、河野省三「神道史の研究」また、塩野啓山の「埼玉史談」所収の論考からの学恩を銘記致します。

神社の杜（五十三）

「やむにまた一本、巨樹が逝く」

片柳 茂生

令和元年九月十三日午前十時三十五分。この大事件は発生しました。ケープルカー滝本駅の正面、参道入り口にあたる襷橋を渡ったすぐ右手にイチヨウの樹が立っています。樹齢約五百年、目通り約五メートル、樹高約二十五メートル。このイチヨウは長い間その厳めしい姿で御嶽詣の人たちを此処で見守り続けてきました。

春の萌え始めた黄緑色の姿も綺麗ですが、その存在を見せつけるのは、やはり真つ黄色に衣装替えた秋の黄葉の時。その立派な姿と、橋梁を昇り降りするケープルカーとの組み合わせは、玄人素人を問わず思わず写真に撮りたくなる構図でしょう。また、このイチヨウの樹は雌だったため毎年たくさんの銀杏を付け、それを皆が競って拾っていました。ただし、果肉の臭さと、車の屋根への直撃弾には困ることしきりでした。またイチヨウの落葉は一斉と言うか短期間で起こることが多いようで、坂道に敷き詰められた大量の落ち葉によつてタイヤは滑り、危険な思いをした人も少なくはありませんでした。

そんな地元の人元より、参詣者や観光客も楽しませてくれたイチヨウは、徐々に樹勢が弱まり、平成二十七

年には樹木医に看てもらう程、見た目にも樹の勢が衰えたことが解るようになりました。樹木医の看たては、根の周りを覆っていた舗装が原因の一つとすることで、舗装を剥ぎ、不要な枝を切るという処置を施しましたが、回復する兆しは見られませんでした。そして近年では不慮の事故を思いばかり、伐採も考えていたところでした。

令和元年九月千葉県に甚大な被害をもたらした台風十五号、この台風がイチヨウの寿命を縮めた要因であることは間違いないでしょう。近所に住む人からは、倒れる二三日前より時折メリ・メリという音がしていたそうです。そして十三日十時三十五分、根元から倒れその生涯を閉じました。

このイチヨウただ倒れただけではありません。イチヨウの周りには駐車場、家、ケープルの橋梁などが存在し、倒れればどこかに被害が及んでも間違いないという状況です。でもイチヨウは、此処しかないという場所と時間を選んで倒れたのです。怪我人は無く、被害も最小限に留めた倒れ方でした。

地上に現れたイチヨウの根は、巨

樹には似つかない貧弱なものでした。今年は黄色く染まった姿を見ることはできません。しかし威勢の良かったこの見事に黄葉した姿を忘れることはないでしょう。今までよく頑張りました。そしてありがとうございました。



敬神奉賛員募集のご案内

当社では、敬神奉賛員を募集しております。敬神奉賛員とは、御嶽大神の御神徳を敬い、皆様の心の拠りどころとして、また武蔵御嶽神社の更なる護持発展を目的に創設いたしました。奉賛員には例祭、祭典・行事のご案内のほか、新年に向けての御神札など各種の特典が受けられます。趣旨にご賛同いただき、ご入会下さいますようお願い申し上げます。

賛助費 五〇〇〇円
※詳しくは、社務所までご連絡下さい。

あ と が き

日本は自然豊かで美しい国です。この御岳山にも沢山の樹木・生き物たちが息づき、私達もその中で共生しているつもりです。そのような中、近年の日本は大きな災害に見舞われることが多く、改めて自然の脅威を身近に感じています。突然倒れたご神木のイチヨウを思うとき、私達の生活を便利にするにばかり捕らわれ、太古から息づく自然に対して配慮が欠けてはいないかと考えずにはいられません。人間も自然の循環の一部であることを思い、奢ることなく共に生きること大切になりたいと思います。

令和になり当社にもフレッシュな人材が入社しました。新元号と共に羽ばたいていくてくれると思います。どうぞ宜しくお願いします。

最後に、令和最初の約半年間を無事に過ごせたことを御嶽大神に感謝し、毎年丁寧に教授下さる先生方、ご奉納頂きました皆様、各種祭典や行事に御協力・御協賛下さいました崇敬者の皆様、各所関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。また、川崎市・長沢御嶽講・講元末吉一夫様、低山トラバレー／山旅文筆家大内征様、写真家鶴巻育子様、玉稿を有難うございました。

令和元年 十月 一日発行

編集 武蔵御嶽神社
〒一九八〇一七五

東京都青梅市御岳山一七六番地

TEL 〇四二八（七八）八五〇〇
FAX 〇四二八（七八）九七四一

印刷 (株)成和印刷
<http://www.musashimikakejinja.jp/>